毒の貴公子と呼ばないで！

百合の戦士

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少しだけジムリーダーが多く、ジムチャレンジが厳しくなっているガラルで毒の貴公子と呼ばれるジムリーダーが頑張るお話。

表の顔はかっこよく、皆から憧れる、そんな存在。

それでいい、例えそれが望んだ事じゃなくても。

なりたい自分じゃなくても、それでも。

まあそれはそれとしてオフの時ぐらいやりたいことやってもいいよね～、仕方ないよ、人間だもの。

目　次

毒の貴公子 ―― 1
ぷにもち姉妹の呑気な日常 ―― 6
キャンピング・ドリーマー ―― 9
朝日と夢と、 ―― 12
幕間　カレー探求者は家出娘 ―― 15

毒の貴公子

腐臭と刺激臭が辺りに漂っている…ガスマスク付けてるから分からないけど、多分そう。
相手のポケモンはじわり、じわりと体力をその体にへばりついたヘドロに奪われ、フラフラとし動きも鈍くなっている。
一方、僕のポケモン…ドヒドイデは余裕たっぷりに相手を眺めていた。
「ドヒドイデ、トドメをさしなさい」
「(こくり)」
ドヒドイデがゆっくりと近づき、頭の触手で相手を吹き飛ばし
『勝者!毒の貴公子、アハト!』
呆然と立ち尽くす相手に会釈をして控え室へと向かう。
「ありがとうございました、またの挑戦をお待ちしておりますよ」
僕はアカリ、ジムリーダーの時の名前はアハトって名乗ってます、ただのどくタイプのジムリーダーです。
…毒の貴公子って呼ばれてます。

「アハト様ー!」
「流石毒の貴公子、どくタイプであの方の右に出る者はいないと言われているトレーナーだけあって、かなりの強者…」
「クールで素敵…毒の貴公子様…」

(……うーん、毒の貴公子、かぁ)
「よ」
「んー?キバナさんだー、どうしたんですー?こんな所にわざわざー」
少し素を出す。
キバナさんだったら別にいいと思う、取り繕ったってバレバレだし意味は無いもんね。
「アレで最後だろ?俺様の所に来るまでまだ時間あるからよ、暇つぶしにちょっとな」

おどけたように笑う彼につられて笑ってしまう。
「僕はあんまりお話得意では無いですがー…それでもいいなら、話し相手になりますよー」
「ありがとな、アハト…いや、今はアカリか？」
「ふふー、アカリでいいですよー？」
しばらく近くのカフェで食事をするついでにたわいも無い会話をし、しばらく話したあと思い切って聞いてみる。
「…それでー、実際どうして僕の所に来たんですー？」
「ん？ああ、暇つぶしっていうのもあるけどよ、実際来たのはさ」
ハンバーガーを豪快に噛みちぎり、キバナさんは僕の目を真っ直ぐに見つめた。
「お前、貴公子って肩書きに納得してんのか？」
「…本音を言うなら、あんまり納得はしてませんねー」
「だろーな」
毒の貴公子、本来どくタイプにはありえない貴公子というかっこよくてきらびやかな呼び名。
けれど、そんな呼び名は僕…私自身が望んだ訳では無かった。
「でも仕方ないですよー、このボードシティの、そして何よりどくタイプのイメージアップの為ですからー」
私の生まれ故郷であり私の担当であるボードスタジアムのある場所、ボードシティ。
ガラルで1番工場が多く、研究所もいっぱいある場所。
…でも、今は改善されたけど昔は汚染物質やゴミ問題がいっぱいあって働いてる人達以外の人があまりよらなくなってしまった。
昔の影響からかどくタイプのポケモン達も多く住み着いて、そのポケモン達も怖い存在だと思われてしまっている。
…誰かが直さなきゃ、勘違いされたままだからねー。
「それに、中性的？って言うんですかねー？ほら、私キバナさんレベルでイケメンですからー」
「自分でいうか？まあ確かにお前は俺様といい勝負だろうけどさ、けど」

「…確かに、そこに私の意思はないと思います。
けど、そんな事言ってられませんからー」
笑う。
笑って、誤魔化した。
そんな私を見てキバナさんは…
「負けねーからな」
そういって、立ち去った。

「いやー負けたー」
どうも、負けました。
チャンピオンカップで思いっきり負けちゃいました、てへぺろりん。
「相変わらずキバナさん強いなー、そのキバナさん倒すダンテさんも相当だけどー」
荒れてたなー、相変わらず?だねー。
「荒れを表に出さない、アカリが珍しいだけ」
「おー?」
後ろを向くと同じジムリーダーであり、大切な家族であるはがねタイプ使いのリグナがいた。
あまり表情が変わらない鉄面皮と小柄な身体がチャーミング。
僕と同じくキバナさんに負けた彼女へガスマスクを外し笑いかける。
「勝ち上がってきたチャレンジャー2人をボコボコにしたフルボッコにしたリグナさんではないかー」
「煽ってる?」
「ないよー」
「……」
「まっへ、ほっへはひっはらないへ」
「こんなモチモチな物をわざわざ露出した人が何をほざくか」
「だってー触りたいでしょー?引っ張らないなら触らせてあげるー」
「……」

何だかんだでこの子も荒れてるよねー、いつもより感情がでてるなー。
「……アカリ」
「んにゅー？なにー？」
「あなたも人の事言えない」
「ありゃー？なんの事ー？」
「マスク越しでも分かる、すごく感情でてる」
「…たはー、マジかー」
僕のほっぺをモチモチしてた手を背中にまわしギュッとハグをしてくれる。
「好きにして、いい」
「…くふふ、それ、自分の鬱憤ばらしも混じってないー？」
「でも、したいのはアカリも」
「正解、最近ご無沙汰だったもんねー」
「チャレンジとリーグ戦があるのにする訳にも行かない」
「それもそっかー」
スマホロトムに頼みタクシーを呼びながらリグナと手を繋いで外へ出る。
久々に2人きりになれるかなー。

「それと」
「んー？」
「もう私との2人きりだから、貴公子は、アハトはお休み」
「……ありがとう、リグナ」
「…ん」
やっぱり、敵わないなぁ。
張り詰めていた糸が切れるような感覚と共に、リグナに寄りかかる。

私達は家に向かう。
ガスマスクは外れ、硬い服は脱ぎ、ありのままの姿となる。

「……それじゃ」
「ふふ、久しぶりだねー…いいよ？」
「…ん」

私は思いっきり、

着せ替え人形にされた。

「ふふふ～、やっぱりリグナの選ぶ可愛い服は最高だね～！」
「この日のために、買ってきた、やっぱりアカリ、いい素材」
こうしたオフの時だけ、私は可愛く、女の子らしくなれる！
やったね！

ぷにもち姉妹の呑気な日常

「にぇへへー」
「アカリ、ごきげん」
「うへへー、そう？」
くるくるくる～と回れば淡いピンクのスカートがふわりと舞う。
丈は長いからパンツは見えない、最高だねー。
「そのスカート、好き？」
「だいだいだいすきー」
スカートだけじゃなくて頭でヒラヒラ動くリボンも小さくて色んなキーホルダーが付いた可愛いカバンも、全部大好き、黒いヘドロより大好き。
「カワイイって最高、だよー」
「完全同意」
うんうんと頷くリグナも黒色のゴシック的なロリータで可愛くなっていた。
最高かぁー？
「うへへー、リグナかわいい～」
「んに」
うりうりと頬ずりをするとリグナも負けじとぐりぐりと頬ずりをしてくれた。
「リグナのお肌相変わらずスベスベでぷにぷにだねー」
「アカリも、モチモチで飽きない、最高」
「相変わらず仲がいいわねぇ」
「当然、ぶい」
「ふふふ、おばあちゃんはそろそろ買い物に行ってくるよ、欲しいお菓子はあるかい？」
「ハッカ飴」
「抹茶団子～」
「相変わらず渋いねぇ…それじゃ、行ってくるわね」
さてさてー、こんな事をしてておばあちゃんに微笑ましい感じで見

られていた私達だけどー…
なんと、実はどちらもガラルが誇るジムリーダーなのです。
ちなみにこの状態で街に出てもバレないよー。
ジムリーダーの時は体と顔を隠す衣装を着てるし声もガスマスクのボイスチェンジャーを使ってるからオフの時はほぼバレない、更にオフの時は表情が緩むから中性的な顔も女の子っぽいのだー。
…ぽいよなー？
ともかーく、そんなこんなでバレないのさー。
ちなみにここは我が家！
リグナのジムがあるペタンクタウンの隅っこにあるのどかオブのどかな家。
私とリグナ、そしておばあちゃんと一緒に住んでいるのだー。
まさかこんなのどかな家にジムリーダーが２人も住んでいるとはだれも思うまい…クシシ。
「ふににー」
「笑い方相変わらず、個性的、ご機嫌？」
「だってー、ありのままの自分でいられるんだよー？
最近半年ぐらいお仕事詰め詰めで戻れなかったしさー？」
「確かに、辛かったね、よしよし」
「うぇへー→」
「レアボイス…」
リグナのお腹に頭を突っ込む形で抱きつけば優しく撫でてくれた。
本当に大変で辛かったから家族との何気ない触れ合いが心に染みるねぇー…
でも、もっと強欲に欲張ってもいいよね～？
「ねーリグナー」
「なに？」
「おやつ食べたらさー、久々にキャンプしない～？」
「…キャンプ、そういえば最近、やってなかったね」
「頼むよー、ジム戦もあってバトルばっかりだったしさー？
バトル無しのお休みキャンプやろうよー、ポケモン達の羽休めにも

なると思うんだ～？」
「…でも、外に出たくない」
「それにー、リグナもまったりゴロゴロもふもふぷにぷにできるよー？」
「ゴロゴロ…モフぷに…？」
「今ならなんと、私の体を好きにできちゃうよー？お得だよー？」
「……」

「おやおや、キャンプの準備かい？」
「うん、アカリがどうしても行きたいって」
「くしし、満更でも無いくせに～」
「……」
「ごみぇん」
　ほっぺたをみょいんみょいん引き伸ばされた。
　でも力があんまり強くないしちっちゃい手でモミモミされてるから逆に気持ちいいんだよねー、くふふ。
「…ヘンタイ」
「うぇへ～？」
　ありゃりゃー？
「ほらほら、キャンプに行く前にお菓子を食べましょ？手を洗ってきなさいな」
「「はーい」」

キャンピング・ドリーマー

ワイルドエリア。
様々なポケモンが生息し、様々な場所で構成される自然豊かなエリア。
広いだけあり安全で子供だけでも遊べる場所から危険で腕に自信のあるトレーナーでさえ近づこうとしない場所もあったり。
そんな多種多様な顔を持ってるだけありここに来る人々の目的も様々。
奥地へと潜り厳しい修行をするスイーツ好き、ひたすら自転車を走らせる卵を抱えた不審者、究極のカレーを求めひたすらカレーを作り続ける猛者…そして
「いや～、いい天気だね～」
「…今はね」
私たちみたいにゴロゴロもふもふキャンプするゆるふわなジムトレーナーとかね～。
元気に辺りを私とリグナの相棒達が駆け回って遊んでいる。
追いかけっこしていたり眠っていたり、中には本を読んでる子までいた、天才かー？
「…今更だけど、雨降らない？」
「大丈夫大丈夫～、天気予報見た感じあんまり降らないから～」
そんな子達を眺めながら私はテントの中の大切な家族に喋りかける。
「それにー、雲見た限り多分大丈夫じゃないかなー？」
「安心できない…それに、日差しが強いままなのも嫌、外に出たくない、引きこもる」
「相変わらずだね～」
テントの奥の薄着になっている少女はじっと私を見つめて、手を広げた。
「来て」
「はいはーい」

勿論お願いを断る訳もなく、あっさりと私は中に入る。
…それにー、正直私もしたかったしねー？
テントに潜り込むと直ぐにギュッと抱きしめられる。
いつの間にかしかれていたお布団に2人仲良く寝そべれば私はリグナだけの抱き枕へと変化する。
ま、私もリグナを私だけの抱き枕にしてるからお互い様だけどねー。
「…んにゅ」
「ふふふ～、私の抱き心地はどうだ～？」
「最高」
「でしょ～？」
「でも、これだとまだ、満足できない」
「くふふ、奇遇だねー…私もなんだー」
布が擦れて落ちる音がやけにテントの中で響き渡っていたのを覚えていた。
そうして、お互い思う存分抱き合った。
しばらく会えなかったし、触れ合えなかった分こうやって互いを求め合う。
自然と力も入って、心臓の鼓動も速まる。
汗が混じりあって、匂いも混ざり合う。
まるで、一つになっていくような、そんな感覚を覚えながらもひとまずの終わりを迎えた。
「…ぷはぁ」
「くふふ、満足した～？」
「…うん」
リグナは恥ずかしそうに顔を赤らめながらも私の眼を真っ直ぐに見つめた。
乱れた髪の毛と荒い息で上下する胸、白い肌をつたう汗とリグナの香りで頭がどうにかなりそうだった。
（やばいねー、凄いそそる…）
なんて邪な考えをしながらもう1回抱こうとしたら虚ろな目にな

りながらリグナがぐらついた。
「あ、あれ？リグナー？」
「……あ」
「あ、あ？」
「暑い…」
「り、リグナー!?」
バタンキューと言わんばかりに仰向けに倒れるリグナを揺さぶる。
そりゃあ、熱がこもりやすいテント内でこんな事をしていれば当然、こんな事にもなるわけでー？
結局、夜までポケモン達と一緒にリグナの介抱をする事になっちゃった、たははー。

「大丈夫～？」
「もう、大丈夫、それにしても…やりすぎ」
「うー…で、でも求めてきたのはリグナでしょ～？」
久しぶりで加減の仕方も分からなかったしー？なんて言ったらため息をつかれた、解せぬー…
と思ったらリグナは困ったように笑う、可愛い。
「そんな事言われたら、怒れない」
「でしょー？」
「…やっぱり、怒ろうかな」
「ごみぇん」
自慢のモチモチほっぺたは相変わらずリグナにすき放題にされまくっていた。

朝日と夢と、

『ごめんな、またしばらく会えなくなる。
最近やけに依頼が多くてな…寂しい思いをさせちゃって、ごめんな？』
お父さんは工場の経営者で何時も工場の従業員さんと一緒に働いて、少しでも働いている人の負担を無くそうと努力している優しい人だった。
お父さんの友達や部下の人達は凄くお父さんを慕っていて、私はそんな凄いお父さんが自慢だった。
そんなお父さんはお仕事が終わった後、少しでも時間があると疲れているのにわざわざ寄来てくれた。
とても嬉しくて、でも…それがお父さんの負担になってるんじゃないかって、不安でもあった。
お父さんはいつもすすだらけの手でぎこち無く撫でてくれようとして…結局撫でないまま下げられる。
工場で働いていたお父さんの分厚くて、ボロボロだった。
いっつもすすや何かで汚れていたし、お父さんもこんな手で撫でたらアカリにどんな影響があるか分からない、なんて言ってた。
…でも。
それでも、私は…
『…だいじょうぶだよ！リグナとリグナのおばあちゃんとおじいちゃんもいるし！さみしくないよ！』
私はお父さんが来る度に笑った。
せめて、疲れが少しでも無くなるように、私の為に来てくれるお父さんの為に。
『そうか…ありがとうな。
リグナちゃんとも仲良く、いい子でいるんだぞ？』
『うん！』
あの時のお父さんは、どんな顔をしていたんだろう？
私は笑っていたから、お父さんも笑ってくれていたらいいな。

『お母さん、もう少し研究所にこもらなくちゃいけないの、研究が終わったらまた遊びましょう?今度仕事の合間をぬって休みを取るから…』
お母さんはお父さんとは違って中々私との時間が取れないって言ってたし、実際中々会えなかった。
でもお母さんはガラルの人々の為に、ポケモンの為になる研究をしていて、お母さんはその仕事に誇りを持っていたし、私もそんなお母さんを誇りに思っていた。
お母さんは研究がひと段落する度に来てくれた。
笑顔で研究がどんなものだったのか教えてくれて、私もそんな嬉しそうなお母さんが大好きだった。
でも、話終わると途端に悲しそうな顔をしていた。
…そんな顔、して欲しくなんかないのに。
『…う、ううん、だいじょうぶ!わたしのことはきにしなくていいよ!』
『……アカリ』
『わたしは…だいじょうぶだから、だいじょうぶだから、おかあさんがゆっくりやすんでくれたほうがわたしはうれしいよ!
そ、それにリグナもいるし!リグナだけじゃなくて、いろんなおともだちもできたから!だから、だいじょうぶ!』
大丈夫だと示す為に、精一杯の笑顔を見せた。
私の事は心配しなくてもいいんだと、私は寂しくなんて無いんだと、伝える為に。
『…ありがとうね、アカリ…ごめんなさいね』
どうして、お母さんが謝るんだろう。
お母さんが謝る必要なんて、無かったのに。

『…アカリ』

『リグナ…？』
ふと、後ろからリグナに抱きしめられた。
ギュッと、優しく…
…優しく…？
…あれ、優しく首がキュッと。
「ちょ、ま、リグナさんー？抱きしめるところ違…」
「りぐにゃ…」
「だ、だめだー!?」
リグナが私の首を抱き枕にしていた。
死ぬかと思いました、まる。
「……それにしてもー、懐かしい夢だったなー…」
隣で静かな寝息をたてながら穏やかに眠るリグナの頭を撫でながら、朝日が昇る空をただ静かに眺め続けた。

「りぐにゃ…それはナットレイじゃない…チラチーノ…」
「夢の中の私おバカ過ぎない？」

幕間　カレー探求者は家出娘

　ワイルドエリアの朝は早い。
　我はアニス、ごく普通のカレー探求者だ。
　まず、カレー作りに欠かせないのは何よりも火だ。
　ただのマッチは愚か、そんじょそこらの炎技などではいけない。
「ウル、頼んだぞ」
『ギ』
　我が同胞、ウルガモスのウルの炎はその点最高峰である。
　温度、火力、柔軟性と全てにおいて優れたこれ以上ないと断言できる炎を作り出してくれる。
「ククク…更にこの炎に…！」
　齢４０年のヨクバリスが住む木の下に落ちていた枯葉をくべる。
　ただの落ち葉と侮るなかれ、長く生きるヨクバリスは落ちた木の葉、アイアントの１匹に至るまで独占し、熟成させる。
　その為木の葉や木の枝など落ちた物全てが最高級品であるのだ。
　…獲得する為にヨクバリスとの死闘を繰り広げたのはいい思い出だ、うん。
　さあ！この炎であらかじめ用意していたこだわりの材料で作ったカレーを煮込めば…！
「ああ…！いい、いい匂いである…！」
『ギギギ』
　ククク…今日も我のカレーは最高級のなんか…あれだ、凄い！
　オボンをベースにフィラとネコブを隠し味としたルーは朝カレーに非常に合う！多分！
「ククク…この匂い、非常に食欲をそそられる…！」
「本当にいい香りだねー」
「…お腹すいた」
「ひぁっ!?」
「ありゃ~?混乱してるね~?」
!!!!!!!!!??
フ
???!???????!?

「大丈夫？」
「あば、あばばばば?!」
『ギギギーギギーギ!?』
「おーい」
「へいへいー？アニスちゃんー？」
「ひやぁあ!?や、や！つ、つつかないで、ください！リグナちゃんもお腹ぷにぷにしないでー！」
「相変わらず愉快だねー」
「…うむ、いいお腹である」
「おおー、太鼓判だねー」
「嬉しくないです！」
　なんという事か、まさかこの者たちに見つかるとは…！
　ここ最近はこの邪智暴虐なる姉妹の魔の手から逃れていたというのに…！
　まさかこの平穏があっさりと
「ん、前よりお腹ぷにぷに、いいね」
「ひあぁぁぁぁ!!!!」
　ダメ！もうダメですコレ！冷静な思考取れません！
　カッコイイカレー探求者崩壊です！
「元から崩壊気味だと思うけどね～」
「ほ、崩壊してませんから！ちょっと人の前だと上手く喋れないだけですから！」
「致命的」
「まあでも、そんななのに私とリグナとは普通に喋れるんだし大丈夫大丈夫」
「アカリさんとリグナちゃんとはわりと長い付き合いですし！慣れの方が大きいんです！」
　って、そんな事より！
「ど、どうしたんです？確かリーグ戦の最中の筈じゃ…？」
「もう終わったよー」
　なんてことだ。

…まあリーグ戦があったって言うのもついこの前に聞いたばかりですけど。
「相変わらず、カレー以外の情報は遅い」
「まあアニスちゃんらしいよねー」
「し、仕方ないじゃないですか！あんな陽の者が好んで集まるようなイベントは苦手なんです！興味もないですし！」
「本音は？」
「一緒に行ってくれるトレーナーの友達がいません…お二人共ジムリーダー側ですし…」
「…よしよし」
「なでなで～」
「だから撫でないでくださ…んにゅ…」
「相変わらず撫でられるの好きだよね～、ほれほれ～」
「好きじゃないです…2人共撫でるのが上手すぎるんです…」
あーもう…悔しいけど本当に撫でるの上手いなぁこの人達…
「もういいや…今日は諦めてこの2人とカレーを探求しよっと…」
（カレー探求するのは変わらないんだ…）
（アニスらしい）

「…ご馳走様」
「ごちそうさまでした～」
「お粗末さまです、それにしても…珍しいですね、アカリさんはともかくリグナさんまでキャンプしに来るだなんて」
「自然でも感じてゆっくりしようかなって思ってねー」
「アカリの付き添い」
「またまたー、なんだかんだで楽しみにしてたでしょ～？」
「うるさい」
「ゴミェン」
「…ふふっ」
相変わらず仲がいいなぁ。
昔と変わらないな、この2人も。

…そういえば。
元気かな、あの子。
なんだか、会いたくなってきちゃった。
我が愛しの妹よ…

『お姉ちゃん、カレーだけだと流石に身体に悪いよ』
『で、でも…』
『でも、じゃない！』
『ほ、ほら！具材をキチンと考えれば栄養だって』
『食べに行くよ』
『はい…』
…うーん、そんな事ないかも。
いやいや！でもいい思い出だって

『お姉ちゃん、稽古はどうしたの？』
『…行ったもん、行ったけど転んで腰を打っちゃって動けないんだもん』
『……』
『……』
『…なら私がマッサージをしてあげる、よく効くよ』
『嘘ですごめんなさいそれだけはどうかご勘弁を』
あの後悲鳴が響き渡ったっけ。
「あれ、もしかしてろくな思い出無い？」
「どうしたのー？」
「ああいえ、今あの子どうしてるのかなーって」
「あの子…サイトウ？」
「ええ、私が居なくなってからどれくらい立ってるか知りませんけど、あの子は今どうしてるのかな、と」
「……」
「…ふ、２人とも？」
「もしかして、あの日から帰ってない感じかなー？」

「そ、そうですが…」
「……何年ぐらい立ってると思う？」
「えーと…1年？」
「……」
「…もしかして、私何かやっちゃいました？」
「人としてやっちゃいけない事をやってるねー」
「そ、そこまで…？」
「予定変更だねー、リグナー？」
「ん」
「え、ちょ、まっ」
「ちなみに6年たってるよー」
「へっ？」

そんな訳で数年ぶりのラテラルタウンです。
…我が故郷よ、我は帰ってきた。
「ってそれより、本当にあの子に会うんです…？」
「当たり前」
「てっきり連絡の1つでも入れてたと思ってたけどー…まさか何も入れずに音信不通のままだったなんてねー」
「だって…すまほろとむ？ってやつ持っていなくて…」
「古代人？」
「そこまで言います？」
文明利器の申し子のリグナちゃんに信じられない物を見る目で見られました、解せません。
「でも本当に連絡手段の1つもないのー？」
「流石に伝書アーマーガアぐらいは持ってますよ…紙と筆が無くてそもそも手紙が書けませんでしたが」
「うん、文句なしの古代人だねー」
「なんで!?」
「……」

「リグナちゃん!?そんなに引かれると傷つくんですが!?」
信じられない物を見る目でドン引くリグナちゃんを引き止めながら、アカリさんに引っ張られるようにして我が家へと帰る事に。

「うーん…やっぱり外観変わってますね…」
「6年も立ってたら、変わる」
「むしろ6年もあんな所にこもりっきりなアニスちゃんがおかしいんだよー?」
「違いますよ!たまに街におりてます!」
「カレー食べに?」
「はい!」
「…カレー馬鹿」
「褒め言葉として受け取っておきます」
「それよりー、さっさとチャイムをー…」
…?
アカリさん、急に固まってどうしたんだろ、う?
「……」
「……ぁ」
視線の先には、我が妹サイトウが立っていた。
「……姉さん」
「…ぁ、ぇ、ぅ…」
ダメだ、言葉がでない。
頭が真っ白になる。
というか冷静に考えたら服もボロボロだしお世辞にも綺麗な身だしなみじゃないし、妹との6年ぶりの再開なのにこれじゃあ…
「えっと、その~サイトウちゃん、これはねー…」
「…アカリ、私達が言う事じゃない」
「うん、まあそうなるよねー…」
うう…当然とはいえ2人からの助けも無い、完全に絶望だコレ…
「姉さん…」
「うぁ…ぅ…」

ヤバい、サイトウが悲しそうな目で私を見てる、そりゃそうですけども、こんな状態で姉が帰ってくるとか私でも同じような哀れみの視線向けますよ。
ともかく！どうにかしなきゃ…なにか方法は…
…あ、そうだ。
「…さい、とう」
「…！」
「ただ…いま、ごめん、ね」
「…姉さん」
「しんぱい、かけた、ね」
「…本当に…そうですよ…！」
「……」
「今までどこに行っていたの!?どうしてそんなになるまで…帰ってこなかったの!?」
「…うまく、せつめいできない、から」
さて、私が考えついた最善策、それは。
「……来て」
拳で語り合う。
非常にシンプル、非常に単純、話さなくて済むパーフェクトコミュニケーション！
「…混乱してるね～」
「暴走癖、相変わらず」
「……分かりました」
サイトウも拳を構える。
私の形だけの構えとは違う、お手本のような構え。
でも、経験では…私が上！のはず。
「…いくよ」
久しぶりの、姉妹の手合わせだ。

「…帰ろっかー」
「うん」